

特別支援教育に期待する

「子どもを理解する」あるいは「子どもとともに歩む」という言葉を、私たちはよく使いますが、今日真の意味でこの言葉が生かされているでしょうか。

子どもは、各人がそれぞれの特性を持って発達しています。このそれぞれの子どもを特性を理解し、ともに歩むためには、私たちは一人一人の子どもの実態を正しく把握し、それぞれの子どもの立場に立った発達支援を行う必要があります。

文部科学省は、平成15年3月「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」を発表しました。そこでは、基本的方向と取組として「障害の程度等に応じ特別の場で指導を行う『特殊教育』から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』への転換を図る」と述べています。また、「特別支援教育とは、従来の特教育の対象の障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人一人の教育的ニーズを把握して、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために、適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うものである」と説明しています。

このことは、従来の「障害の種類や程度に対応して教育の場を整備し、そこできめ細やかな教育を効果的に行う」という視点で展開されてきた特殊教育（障害児教育）から、今後は「障害のある児童生徒の視点に立って一人一人のニーズを把握して必要な教育的支援を行う」という特別支援教育の基本的な考え方にシフトするという意味です。中には「特別支援教育は、LD、ADHD、高機能自閉症の子どものためのものだ」と考えている人がいますが、それは大きな誤りです。確かに、LD、ADHD、高機能自閉症への支援の在り方の研究が特別支援教育という考え方の契機になっていますが、その内容及び求めるところは、障害のあるすべての子どもたちに対する教育の基本であります。

私たちは、平成15・16年度に特別支援教育推進体制モデル事業として、一人一人の子どもの教育的ニーズを把握し適切な教育的支援を行うという基本的な視点に立って、モデル事業の指定地域を中心に実践を進めてきました。本冊子は、その経験をもとにした、より良き特別支援教育を推進するためのガイドブックです。

子どもは、それぞれ固有の方法で、ものを見、聞き、それに意味づけし（認知し）、コミュニケーションをしています。一人一人の子どものニーズとは、この子どもの認知の特性から生まれるものであり、この認知特性を知り、それに合わせた教育的支援を行うことが最も大切です。「多くの子どもはこうだから」「障害の種類がこうだから」「発達の程度はこうだから」ということではなく、この子はこういう特性（認知特性）があるのだからという視点で、「子どもを理解し、子どもとともに歩む」ようにしていきたいものです。

現場の先生方が、特別支援教育の基本的な考え方をより深く理解して、子どもの立場に立つという視点から一人一人の子どものニーズに応じた教育を実践され、子どもたちのためにより適切な発達援助をされることを期待しています。

特別支援教育推進体制モデル事業調査研究運営会議

委員長 友久 久雄